

キャリア教育の取り組みと大学生のキャリア意識変化の 関連についての追跡研究Ⅱ—進路決断不安を中心に—

Relationship between Career Education and Career Consciousness
of University Students -Anxietys of Career Decision -

李艶・有山篤利

Li Yan, Ariyama Atsutoshi

要 約

大学生の就職にあたって、「自己の適性・適職を自覚していない」「進路を決断できない」、いわゆる進路不決断状態がしばしば認められる。主な原因は、進路選択における不安や進路選択過程に対する自己効力感が不足しているためと考えられる。大学生に対するキャリア教育の取り組みにより、進路選択過程における自己効力感を高めることにより、進路決定できるようになると考えられる。本研究は1年間の追跡調査により、キャリア教育プログラムの取り組みが学生の進路決断不安を軽減する効果があるか否かを検討することを目的とした。調査は滋賀県内の私立大学1年生から3年生、116人を対象に3つの時期に分けて調査を行った。調査には清水(1990)「進路不決断尺度」を利用した。その結果、わずか1年の間にかなりの変化が見られた。キャリア教育により、学生が将来の進路に関心を寄せるようになり、キャリア教育の効果が現れたと言える。また、進路選択において、周りの環境とどのように関わっていったらよいかという不安が認められた。さらに、現在の経済情勢から、就職にあたっての選択肢が極めて少なくなったことにより、学生が現実的な考えを持つようになり、却って選択に関する不安は減少する傾向も認められた。

Key Words : キャリア意識, キャリア教育, 進路決断不安

目 的

今日のキャリアに対する関心の急速な高まり、とりわけキャリア創造と開発、自律的なキャリア形成への関心の高まりは社会的背景・経済情勢・人々の価値観の変化などと関係がある。

バブル経済が崩壊して10年以上経ち、かつ10年以上にわたる景気の停滞、技術革新・情報社会の到来、情報に関連する新興企業の出現、自動車産業などにおける産業構造の転換、海外進出企業の増加、経済のグローバル化、女性の社会進出、少子高齢化などのさまざまな変化により、人々の活動が活発になっている。

また社会の変化に伴って、特に若い世代では、仕事の価値観・職業観が変化してきた。その特徴として2極化の傾向がある。しっかりした生き方・働き方を持っている人々もいるが、楽な仕事をして高収入を得たいというような安易な考えによって、あまり将来こと・職業のことを考えない人々も増えている。また、若者は自発的に離職・転職をし、会社を移りたい、仕事を変えたいと考える人が増えている。

一方最近の大学では資格取得に向けて勉強する大学生が多くなってきている。大学生はどの企業でも通用するスキル、社会的に認知された資格を確保し、就職に役立たせようと考えている。これは自立への第一歩で、大いに勤めたい。

このように職業世界が大きく転換しつつある今日、人が職業に就き、職業人としての人生をどのように発展させるかという“キャリア”時代が到来している。

スーパー (Super, D. 1951) は、職業 (Occupation) という市場価値もつ特定の活動と区別し、キャリアには長期の時間的スパンの中での個人の仕事との関わりという意味が含まれると述べている。その後スーパー (1976) は、個人の生涯にわたって自己関与 (コミットメント) することの表現として職業およびその他の様々な役割の連続であること、そして、「キャリアは、個人がそれを追求することによってのみ存在するものである」とも述べている。

1970年代以降、研究が進むにともない、キャリアについての解釈や定義も多様化してきた。マクダニエルズ (McDaniels, 1978) は、ライフスタイルの一概念という解釈をしており、個人が生涯にわたって様々な仕事や活動に関わっていく様相である、と説明している。

またレイノールとエンティン (Raynor & Entin, 1982) はキャリアを「現象学的な概念であると同時に、行動に関する概念である」と述べて、次のように定義づけている。すなわち「個人が行うこと、その人の自己についての見方と結びつける概念である。ある人のキャリアとはその人が長期間に渡って抱く自己についての感覚から成り立っており、それは個人の行為とその結果を通じて明確化される。キャリアは、ひとが自分の社会環境の文脈の中で自己 (具体的には、個人の将来計画、過去の成功・失敗経験、現在身についている能力や特性などについて) の捉え方を規定する」と定義している。

シャイン (Schein, 1978) は、その著『キャリア・ダイナミック』の中で、キャリアとは、知的専門職業あるいは明確な昇進をともなう職業に限られるわけではなく、熟練の必要の少ない職業および昇進のない職業にも全く同様にあてはまる、と述べている。

アーサー、ホール、ローレンス (Arthur, Hall, & Lawrence, 1999) は、キャリアについて「個人が長年にわたって積みかさねた働く体験の連続」と定義し、さらに次のような意味を内包すると解説している。すなわち、①雇用だけではなく多様な働く経験 (家事その他) にも焦点を当てている。②個人間の差異ではなく、個人内の差異つまり個人独自の体験に限られる (働く人はすべてキャリアを作る)。③積み重ねられた体験の連続であり、時間的な幅と流れを意味する長期にわたる意思決定である。という3つの要素が含まれるという。

ハーとクレイマー (Herr & Cramer, 1996) は、キャリアという言葉に「個別性」という概念が内包されていることを強調している。つまり、キャリアは「人によって異なるユニックなものである点に注意を喚起し、従って個人が生涯の中で経験する“何を選び、何を選ばないか”によって創造されるダイナミックなものである」と説明している。

さらに文部科学省が2004年に公表した「キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議報告書」の中で、キャリアについて、次のように定義している。「「キャリアは『個人』と『働く』

との関係の上に成り立つ概念であり、個人から独立して存在し得ないということである。……個々人が生涯にわたって遂行するさまざまな立場や役割の連鎖およびその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」。その後、上記の報告書は、2004年以降全国の小学校、中学校、高等学校、および高等教育機関にて取り込まれるようになったキャリア教育の指針となっている。

個人の視点に立つキャリアの見方とは、個人が自分の人生の主要な時間帯の中で、①どういう目的をもって、②どういう仕事をするのか、そのためには③どういう計画を立てて、④どういう努力を行わなければならないか、という視点に立つ立場である。つまり、この視点では、自らのキャリアについて自分で判断し、自分で選択してゆく主体的な個人像が浮かび上がってくる。

「進路決断」とは、どういう仕事をするかという進路の決断ができる状態を表す概念である。大学生の進路相談に当たって、学生が進路の意思決定が出来ないということを感じている人が多いであろう。大学生の進路指導では、そうした進路の決定意思が出来ない者、すなわち「進路不決断」者にどのように助言と指導するかが大変重要な課題になっている。また、各々の対応においては、進路不決断の程度や、どのような原因によるかを探る必要性がある。

このような進路不決断つまり職業未決定の問題を考えるには、進路選択のプロセスそのものに焦点を当てた「進路選択過程に対する自己効力感」に注目する必要があるだろう。これは、自己評価・情報探索・計画立案・問題解決など進路選択に必要な行動をうまく行えるかという自己効力感の問題とみなすことである。この分野の研究は、Taylor & Betz (1983) から始まり、Osipow, Gernal, & Barak (1976) や Holland & Holland (1977) などによって、進路に関する意思決定という課題への取り組みやそのためのスキルについての「自信の無さ」が、不決断の規定要因として重要な変数であるという報告がなされており、Taylor らはその「自信の無さ」という概念を、自己効力感という観点から捉えなおしている。そして、Taylor らは、C D M S E 尺度 (Career Decision-Making Self-Efficacy) を開発し、進路を選択するプロセスにおいて必要な行動に対する自己効力感の測定を可能にした。このC D M S E 尺度を使った多くの研究がなされているが、特に Taylor & Betz が行ったように、自己効力感は職業未決定・進路不決断の抑制に関与するという報告は多い。つまり、この自己効力感の高い者は、進路選択行動を活発に行い、逆にそれが低い者は、進路選択行動がたとえ自分の人生の目的を達成するために必要なものと理解していたとしても、進路選択を避ける、あるいは不十分な活動に終始してしまうと考えられる (浦上, 1995; 下村, 2001)。

また Bergeron & Romano (1994), Mathieu, Sowa & Niles (1993), Taylor & Betz (1983) は進路不決断と自己効力感の関連、Robbins (1985) は進路不決断・自尊感情・特性不安などとの関連、Taylor & Popma (1990) は進路不決断・進路に対する重要性・自己統制感・考慮する職業の幅・職業選択に対する自己効力感との関連に着目し、進路選択過程においては自己効力感は特に進路不決断と強く関連があることを示している。自己効力感により行動変容のために自己を操作することが可能になり、また教育的指導においてこの自己効力感を高めることができると考えられている。このことによって、「進路決定できない」状態から「進路決定できる」状態に

転換させることもできるだろうと予測される。つまり、大学生のキャリア意識は学校のキャリア教育によって、改善できると言える。著者たちが勤務している大学では、キャリア教育プログラムを取り入れ（取り組みの詳細内容は大学のホームページ参照）、大学生のキャリア基礎力と基本的態度を養成する。本研究は1年間の追跡調査により、キャリア教育プログラムの取り組みが、学生の進路決断の意識にどのような影響を与えたかを検討することを目的とする。

方 法

被調査者：滋賀県内の私立大学1年生から3年生、3つの時期に分けて調査を行った。それぞれの時期は、2010年4月、7月、12月であった。調査参加者は最初145人であったが、2回目もしくは3回目の調査日に都合がつかない学生がいたため、追跡調査全過程の参加者は116名であった。

調査項目：

1. 本調査では清水（1990）の「進路不決断尺度」を利用した。この尺度は職業決定不安、職業選択葛藤、職業相談希求、職業障害不安、職業外的統制、職業情報不安、職業モラトリアム、職業準備不安の各下位尺度から成り立っている。回答は「全くあてはまらない」（1点）から「よく当てはまる」（5点）の5段階で求められる。

【進学（職業）決定不安尺度】

1. 進学先（将来の職業）を決めることに対して不安がある。
2. 進学先（将来、職業）を決めることがうまくいかどうか心配である。
3. どのようにして進学先（職業）をきめればよいかわからないので不安である。
4. 進学先（将来の職業）を決めることがばくぜんとしていて不安である。
5. 進学先（就職先）を決めることのむずかしさを考えると不安になる。

【進学（職業）選択葛藤尺度】

1. いろいろなことに興味があるので、どこを進学先にしたら（どの職業を選んだら）よいかわからない。
2. 魅力ある進学先（職業）がいくつもあるので、進学先（将来の職業）を決められない。
3. 可能性のある進学先（将来の職業）がたくさんあるので、どれにしたらよいかわからない。
4. いろいろと考えすぎて、自分に合う進学先（職業）が決まらない。
5. ほかの人の意見がいろいろとあるので、自分に合う進学先（職業）を決めることができない。

【進学（職業）相談希求尺度】

1. 進学（職業選択）の問題は重要なことなので、誰かと相談したい。
2. 今まででも重大な問題は親などと相談してきたので、進学（職業選択）の問題でも相談したい。

3. 自分一人で何かを決めた経験が少ないので、進学（将来の職業）について誰かと相談したい。
4. 進学先を決めるために（将来の職業について）、誰かと相談や話し合いをしたい。
5. 自分に合う進学先（職業）を教えてくれるような検査を受けたい。

【進学（職業）障害不安尺度】

1. 希望する進学先（将来の職業について希望）はあるが、それに親が反対するのではないかと心配である。
2. 思わぬことで希望する進学先に入学（職業につくことが）できないかもしれないと不安である。
3. 進学先（将来の職業）について、友達と意見が違うのではないかと心配である。
4. 社会の変化や景気の変動が、希望する進学先（職業）に大きな影響を与えるのではないかと不安である。
5. 何かの影響で希望する進学先に入学（職業につくことが）できなくなるのではないかと心配になる。

【進学（職業）外的統制尺度】

1. 進学先（就職先）の決定は、運や偶然によって決まることが多い。
2. 進学先（就職先）の決定は自分一人の力ではどうしようもない。
3. 自分の努力や能力よりも、他からの影響で進学先（職業）が決まることが多い。
4. 自分だけでは、進学先（職業）は決定できない。
5. 進学（将来の職業）のために積極的に努力するよりは、チャンスを待つ方がよい。

【進学（職業）情報不足尺度】

1. 自分の興味や関心がよくわからないので進学先（将来の職業）が決まらない。
2. 自分の能力や適性がよくわからないので進学先（将来の職業）が決まらない。
3. 進学（就職）した後での学校（職業）生活のようすがよくわからないので、進路先（将来の職業）が決まらない。
4. 進路先を決めるために必要な具体的な情報がないので進学先（将来の職業）が決まらない。
5. 自分のことについても、進学先（職業）のことについても、よくわからないので、進学先（将来の職業）が決まらない。

【進学（職業）モラトリアム尺度】

1. いままであまり進学（職業）のことを真剣に考えたことがない。
2. 将来のことはわからないから、進学先（職業）のことは考えたくない。
3. 進学（将来の職業）のことを真剣に考えたことがない。
4. 進学などせずに（将来、職業につかずに）、好きなことをしていきたい。
5. 進学（職業）のことなど考えずに、自分の好きなことに集中していきたい。

【進学（職業）準備不安尺度】

1. 進学の希望はあるが、入学試験が心配である（具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である）。
2. （将来の職業についての）希望は明確なのだが、入学試験（採用試験）に自信がない。
3. 希望する進学先（職業）はあるが、これが最良なのかどうか不安である。
4. 希望する進学先（職業）において十分に活躍できるかどうか不安である。
5. 進学（職業選択）のための準備が十分であったかどうか不安である。

2. 自由記述

「あなたは職業についてどう思いますか」という質問に対して自由に記述してもらう。

結 果

1. 3つの時期におけるキャリア意識の変化

職業決定不安、職業選択葛藤、職業相談希求、職業障害不安、職業外的統制、職業情報不安、職業モラトリアム、職業準備不安のそれぞれに関して、キャリア教育の3つの時期（初期、中期、後期）の得点（程度）は表1と表2に示すとおりである。

表1 進路不決断の変化

	初期			中期			後期		
	平均値	不偏分散	標準偏差	平均値	不偏分散	標準偏差	平均値	不偏分散	標準偏差
決定不安 1	3.283	1.690	1.30	3.389	1.856	1.362	3.271	1.856	1.363
決定不安 2	3.283	1.690	1.30	3.556	1.785	1.336	3.398	1.814	1.347 ▲
決定不安 3	3.283	1.690	1.30	3.341	1.779	1.334	3.331	1.779	1.334
決定不安 4	3.283	1.690	1.30	3.405	1.731	1.316	3.339	1.747	1.322
決定不安 5	3.283	1.690	1.30	3.484	1.676	1.295	3.280	1.827	1.352
選択葛藤 1	2.738	1.625	1.27	2.873	1.488	1.220	2.839	1.658	1.288 ▼
選択葛藤 2	2.738	1.625	1.27	2.754	1.371	1.171	2.593	1.508	1.228 ▼
選択葛藤 3	2.738	1.625	1.27	2.545	1.338	1.157	2.458	1.430	1.196
選択葛藤 4	2.738	1.625	1.27	3.008	1.592	1.262	2.924	1.815	1.347 ▲
選択葛藤 5	2.738	1.625	1.27	2.754	1.419	1.191	2.534	1.499	1.224
相談希求 1	3.669	1.376	1.17	3.595	1.395	1.181	3.432	1.495	1.223 ▼
相談希求 2	3.669	1.376	1.17	3.238	1.559	1.249	3.364	4.627	2.151 ▼
相談希求 3	3.669	1.376	1.17	3.056	1.557	1.248	3.034	1.625	1.287 ▼
相談希求 4	3.669	1.376	1.17	3.318	1.211	1.100	3.314	1.465	1.210 ▼
相談希求 5	3.669	1.376	1.17	3.373	1.516	1.231	3.229	1.768	1.330 ▼
障害不安 1	1.841	1.412	1.18	2.254	1.599	1.265	2.119	1.723	1.315 ▲
障害不安 2	1.841	1.412	1.18	2.897	1.341	1.158	2.839	1.743	1.320 ▲
障害不安 3	1.841	1.412	1.18	2.318	1.530	1.237	2.059	1.475	1.215 ▲
障害不安 4	1.841	1.412	1.18	2.960	1.462	1.209	2.763	1.943	1.394 ▲
障害不安 5	1.841	1.412	1.18	2.857	1.371	1.171	2.873	1.668	1.291 ▲

表2 進路不決断の変化

	初期			中期			後期		
	平均値	不偏分散	標準偏差	平均値	不偏分散	標準偏差	平均値	不偏分散	標準偏差
外的統制 1	2.683	1.427	1.19	2.730	1.431	1.196	2.627	1.586	1.260
外的統制 2	2.683	1.427	1.19	2.730	1.399	1.183	2.746	1.593	1.262
外的統制 3	2.683	1.427	1.19	2.635	1.178	1.085	2.703	1.270	1.127
外的統制 4	2.683	1.427	1.19	2.691	1.351	1.163	2.771	1.597	1.264
外的統制 5	2.683	1.427	1.19	2.524	1.307	1.143	2.585	1.561	1.250
情報不足 1	2.752	1.910	1.38	2.818	1.622	1.274	2.780	1.592	1.262
情報不足 2	2.752	1.910	1.38	2.889	1.556	1.247	2.915	1.702	1.305 ▲
情報不足 3	2.752	1.910	1.38	2.770	1.315	1.147	2.907	1.538	1.240 ▲
情報不足 4	2.752	1.910	1.38	2.818	1.398	1.183	2.975	1.512	1.230
情報不足 5	2.752	1.910	1.38	2.944	1.557	1.248	3.017	1.641	1.281 ▲
モトリアム 1	2.607	2.046	1.43	2.484	1.948	1.396	2.593	1.782	1.335
モトリアム 2	2.607	2.046	1.43	2.444	1.593	1.262	2.542	1.703	1.305
モトリアム 3	2.607	2.046	1.43	2.349	1.733	1.317	2.390	1.505	1.227 ▼
モトリアム 4	2.607	2.046	1.43	2.548	2.026	1.423	2.475	2.029	1.425 ▼
モトリアム 5	2.607	2.046	1.43	2.492	1.964	1.401	2.517	2.047	1.431
準備不安 1	3.110	2.071	1.43	3.151	2.001	1.415	3.110	1.825	1.351
準備不安 2	3.110	2.071	1.43	3.024	1.991	1.411	2.983	1.829	1.352
準備不安 3	3.110	2.071	1.43	2.841	1.735	1.317	2.703	1.766	1.329 ▼
準備不安 4	3.110	2.071	1.43	2.952	1.790	1.338	2.873	1.650	1.285 ▼
準備不安 5	3.110	2.071	1.43	3.008	1.544	1.243	2.915	1.583	1.258

これによると、初期と比べて後期においてはかなりの変化が見られる。

①進路を決めることの不安、②就職情報の不足における不安、③職業障害に対する不安、④自分のことが良く分からないことからの不安がいずれも強くなっている。

一方、①選択肢が少ないための不安、②相談希求の意欲、③進学（将来の職業）のことを真剣に考えたことがない、④進学などせずに（将来、職業につかずに）、好きなことをしたい、といった傾向、⑤希望する進学先（職業）はあるが、これが最良なのかどうか不安である、⑥希望する進学先（職業）において十分に活躍できるかどうか不安である、といった就職準備に関する不安は弱くなっている。また、進路先が少ないため、準備に関する不安も低くなっている。

以上の結果から、キャリア教育の取り組みにより、進路を決めることに関して色々考えるようになったために、不安が増えた。それだからこそ、キャリア教育により学生が将来の進路に感心を抱くようになったことの教育効果といえる。また、進路決定に関わって、周りの環境とどのような関わりをすべきかについての不安が高くなっている。さらに、現代の経済情勢から、就職にあたっての選択肢が極めて少なくなったことから、学生が現実的な考え方をするようになり、選択不安は減ったと考えられる。キャリア教育の取り組みにより、就職について、学生が正常な緊張感や不安を抱くようになったといえる。

また、就職についての外的統制についての考え方には変化が見られなかった。すなわち、キャリア教育は学生の進路選択に関して、宿命的な考え方の影響は見られない。

2. 質的データの結果

「職業についてどう思うか」の自由記述で得られたデータを KJ 法（文化人類学者川喜田次郎がデータをまとめるために考案した手法）によって分析した。

本研究では、自由記述の内容を一つ一つキーワードで示し、カテゴリーに分類した。要因 1 は「不安」、要因 2 は「やりたいこと」、要因 3 は「難しい」、要因 4 は「自分に合うこと」、要因 5 は「大切だ」、要因 6 は「生活のため」、要因 7 は「わからない」、要因 8 は「その人が選んだこと」、要因 9 は「能力が必要だ」、要因 10 は「嫌だ」であった。その結果を表 3 に示している。

表 3 3 期についての職業についての思いの比較 (人)

時期	①不安	②やりたいこと	③難しい	④自分に合うこと	⑤大切だ	⑥生活のため	⑦わからない	⑧人が選んだこと	⑨人が選んだこと	⑩嫌だ
初期	3	6	6	4	4	3	3	2	0	2
中期	11	8	9	0	5	4	0	0	0	0
後期	10	0	1	4	0	3	3	0	3	0

中・後期においては職業について、不安を感じる学生が増えたが、職業はやりたいことと思う学生が減っている。

考 察

1. 3つの時期のキャリア意識の変化

初期に比べると後期においては①進路を決めることへの不安、②就職情報の不足における不安、③職業障害に対する不安、④自分のことが良く分からないことからの不安が強くなったために、職業を決めることがうまくいかどうか心配する気持ちが強くなっている。これらの状況は、希望する将来の職業はあるが、それに親が反対するのではないかと心配である、思わぬことで希望する職業に就くことができないかもしれないと不安である、将来の職業について、友達と意見が違うのではないかと心配である、社会の変化や景気の変動が、希望する職業に大きな影響を与えるのではないかと不安である、何かの影響で希望する職業に就くことができなくなるのではないかと心配になる、といった諸々の職業障害に対する不安を反映している。また、自分の能力や適性に対してよくわからないので将来の職業が決まらない、就職後のイメージがよくわからないので、将来の職業が決まらない、さらに、自分のことについても、職業のことについても、よくわからないので、将来の職業が決まらない、というような自分と職業に対する情報と知識の不足に対する不安も、後期には高かまっている。このように不安が高くなったことは、キャリア教育プログ

ラムを受けたことにより、将来の就職のことを真剣に考えるようになったことの表れと考えられる。

魅力ある進路（職業）がいくつもあるので、進路がなかなか決められない、可能性のある進路がたくさんあるので、どれにしたらよいかかわからない、といった「選択葛藤」の傾向、職業選択の問題は重要なことなので、誰かと相談したい、今までも重大な問題は親などと相談してきたので、職業選択の問題でも相談したい、自分一人で何かを決めた経験が少ないので、将来の職業について誰かと相談したい、進路を決めるために、誰かと相談や話し合いをしたい、自分に合う進路を教えてくださいのような検査を受けたい、といった「相談希求」傾向、将来の職業のことを真剣に考えたことがない、進学などせずに（将来、職業につかずに）、好きなことをしていきたい、といった「モラトリアム」傾向、希望する職業はあるが、これが最良なのかどうか不安、希望する職業において十分に活躍できるかどうか不安、といった準備不安などは、いずれも後期において弱くなっている。さらに、進路決定にあたり、周りの環境とどのような関わりを持つべきかについても関心が高まっているといえる。このようなことは、学生たちが現実の超氷河期の就職状況におかれて、選択肢が極端に少なくなったために、反動的に相談希求や準備の不安などが低下したのではないかと考えられる。

したがってキャリア教育により、学生が将来の進路に感心を寄せるようになり、キャリア教育の効果が現れたと言える。

2. 職業観について

「職業についてどう思うか」の自由記述で得られた結果、大学生たちは職業について「不安」「やりたいこと」「難しい」「自分に合うこと」「大切だ」「生活のため」「わからない」「人が選んだこと」「能力が必要だ」「嫌だ」などと認識している傾向が見られた。また、キャリア教育プログラムの実施後、職業について、真剣に考えるようになり、そのために自分の進路について不安を感じる学生が増えたと考えられる。一方、職業についてやりたいと思う学生が後期には減っている。これは、おそらく「職業」に対してより深く考えるようになったためと言える。つまり、職業は単にやりたいことだけではなく、職業（仕事）は何のために、どのように選択し、どのようにやるのか、といったような疑問を持つようになったためと考えられる。

今後の課題として、学生における自己効力感の変化の内容と照し合わせて、キャリア教育のプログラムの在り方をさらに検討していく必要がある。

文 献

- Arthur, M.B., Hall, D.T., & Lawrence, B.S. 1989 Generating new directions in career theory: The case for a trans disciplinary approach .In M.B. Arthur, D.T. Hall, & B.S. Lawrence (Eds) , *Handbook of career theory*, Cambridge England: Cambridge University Press. pp. 7-25

- Bergeron, L. M. & Romano, J. L. 1994 The Relationships among Career Decision-Making Self-Efficacy, Educational, Indecision, Vocational indecision, and gender. *Journal of College Student Development*, 35, pp. 19-24.
- Herr, E. L., & Cramer, S. 1996 *Career guidance and counseling through the life span: Systematic approach*. N.Y.: Harper Collins.
- Holland, J. L. & Holland, J. E. 1977 Vocational Indecision. *Journal of Counseling Psychology*, 24, pp. 404-414.
- McDaniels, C. 1978 The practice of career guidance and counseling. *UBFORM*, 7, 1-2, 7-8
- Mathieu, P. S., Sowa, C. J. & Niles, S. G. 1993 Differences in Career Self-Efficacy among Women. *Journal of Career Development*, 19, pp. 187-196.
- Raynor, J.O. & Entin, E.E. 1982 *Motivation, Career striving, and ageing*. New York: Hemisphere.
- Schein, E. H. 1978 *Career dynamics: Matching individual organizational needs*. Reading, MA: Addison-Wesley
- シャイン, E.H. 二村敏子・三善勝代訳 1991 キャリア・ダイナミクス—キャリアとは, 生涯を通じての人間の生き方・表現である 白桃書房
- Super, D. E. 1951 Vocational: Implementing a self-concept. *Occupations*. 30, 88-92. research. N.Y.: Taylor & Francis. 3-40
- (田中宏二「産業ストレスと健康」1992 『職業・人事心理学』松本卓三・熊谷信順編著 139-151 ナカニシヤ出版)
- 清水 1990 進路不決断尺度の構成 『心理学ファイル』No 3 pp. 351-364
- Taylor, K. M. & Betz, N. E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22. pp. 63-81.
- Taylor, K. M. & Popma, J. 1990 An Examination of the Relationships among Career Decision-Making Self-Efficacy, Career Salience, Locus of Control, and Vocational Indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 37, pp. 17-31.